



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	経済原則と経済法則
Author(s)	平野, 蕃
Citation	季刊農業経営研究, 4, 7-7
Issue Date	1958-05-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/36274
Type	departmental bulletin paper
File Information	4_7.pdf



経済原則と 経済法則

平野 蕃

社会が社会として存続するために、まもらなければならない原則というものがある。いわば、超歴史的な法則性であり、そのような原則が、特定の歴史的社會でとる形態規定を法則といて、両者を区別する人がある。宇野弘蔵教授の経済原則と経済法則の使い分けなど、そのよき例である。

最近、わたくしの目にとまつた山本二三丸、置塩信雄両教授の再生産論の新著も、そのよき例である。両氏とも、社会が社会として存続するための生産の一般性と、その一般原則が、特定の歴史的社會でとる特殊歴史的法則をはつきり区別して論じておられる。

このことを、この数年間、わたくしが関心をもち続けてきた、農業における商品生産と自給生産の問題にあてはめてみれば、商品生産も自給生産も、ともに、それが生産である以上にともに支配される共通性（一般的原則）と差別性（特殊法則）というものがある、考えられる。商品生産と自給生産とが、一個同一の農業経営内に並存しているメカニズムは、どのようなものであろうか。

商品生産の経済法則と自給生産の経済法則とは、どの点で共通の地盤にたち、どの点で形態

・機能をわかちつのであろうか。

自給生産と商品生産とは、差別性のみの上にたつ、水と油・木に竹をついだような関係にあるのであろうか。

自給生産の経済法則と商品生産の経済法則の共通性については、マルクスがロビンソン物語のうちで、明快に指摘している。

貨幣も商品交換もない完全な自給自足のロビンソン経済のうちに「価値のいつさいの本質的な諸規定が含まれている」といつている。

自給生産といえは、なにか、主観的な恣意のチョウリョウする場でもあつて、経済的な法則性がないような文章にぶつかつて、目をみはることがある。

自給生産と商品生産とが、並存している小農経済の歴史的な性格を論ずる段になれば、特定の経済（たとえば、日本の資本主義経済）の、さらにまた特定の段階規定として論じなければならない。日本の農業の商品生産が英米の商業的農業のように自生的にスムーズにのびない理由については、自給生産の基体性といつた観点からでなく、日本の資本主義経済と農業との関連を、資本主義発展の特質からみなければならないであろう。けれど、アクティヴな側面は商品経済・資本主義の面であり、パシヴな防衛の立場は自然経済・自給経済の側だからである。

かりに、自給生産の存在が基盤的な強韌性を示すとしても、それは、自給生産の基体性といつたアン・デツヒな観点からで

なく、日本の資本主義自体が、自給生産を残存せしめているメカニズムとしてみるべきではなからうか。長期的にみれば、日本の農業も、自給的な雑穀作がおとろえ、草肥農業が解体し、馬産から酪農へと移行せんとして、商品生産が進展する方向にあるのではなからうか。

（東北大学教授）

水田酪農に對する一つの問題点

渡辺以智四郎

水田酪農と一口にいうもその使い方が稍明確を欠くように思われる。水田を主体とするか飼料畑を別に有して家畜を飼育している経営形態もあり、水田だけで家畜を飼っている場合も水田酪農と称しているようである。然し「水田酪農」と銘をうつ以上は水田専營で家畜（主として乳牛）を入れているものを指称することが妥当であると思う。斯う限定して酪農問題を考えて見たい。水田専營で家畜を飼うということになると飼料作物を栽培する面積を必要となる。それで水田の一部を畑に還元して飼料作物を作付けることになる。この場合永久に畑地として利用する場合と、2、3年位で又水田に転換する場合とがある。後者の場合はこれを田畑輪換或は田畑輪作などといわれている。そこで問題となるのは後者の場合である。戦前に永山の農業試験場で附近の農家に移嘱して田畑輪換の経営試験を行